

田村彰英 夢の光

Tamura Akihide Exhibition:
Light of Dreams

2012年7月21日（土）－9月23日（日）

東京都写真美術館 2階展示室



主催：東京都 東京都写真美術館／読売新聞社／美術館連絡協議会
助成：芸術文化振興基金
協賛：ライオン／清水建設／大日本印刷／損保ジャパン／日本テレビ放送網
協力：日本カメラ社

＜BASE 2005-2012＞より 《厚木》
2009年 作家蔵

展覧会概要

東京都写真美術館では、1970年代以降の現代日本写真史に大きな影響を及ぼし、いまなお注目を浴び続ける田村彰英の個展「夢の光」を開催いたします。

田村彰英（1947-）は東京総合写真専門学校在学中から、同校の校長であり写真評論家の重森弘淹にその才能を高く評価された写真家です。1960年代後半から70年代前半にかけて米軍基地を撮影した〈BASE〉が、社会的・政治的文脈を排除したきわめて感覚的な映像として注目され、以後、カメラ雑誌などで作品を発表するようになります。

1974年、ニューヨーク近代美術館で開催された「ニュー・ジャパニーズ・フォトグラフィー」展に発表した定点観測の手法による〈家〉は、同館写真部門のディレクター、ジョン・シャーコフスキーに推挙され永久保存となるほか、多くの作品が国内外の美術館に収蔵されています。

1980年代から90年代にかけては、変容が進む都市の景観を記録したシリアスな作品を精力的に発表し、田村は常に日本の現代写真の第一線で活躍し続けてきました。本展は、国内の米軍基地を撮影した幻の名作〈BASE〉のほか、未発表作品を含む約115点の作品で創作活動の軌跡をたどり、時代を経ても色あせない田村の写真世界を堪能する格好の機会です。

作家紹介

田村彰英（たむら・あきひで 1947-）

東京生まれ。1969年、東京総合写真専門学校研究科卒業。74年、「ニュー・ジャパニーズ・フォトグラフィー」展（ニューヨーク近代美術館）、「15人の写真家展」（東京国立近代美術館）に参加するなど、20代の頃よりその才能を認められ、日本を代表する写真家として活躍する。84年、写真集『TAMURA PHOTOGRAPHS』で日本写真協会新人賞を受賞。「影武者」「乱」「夢」「八月の狂詩曲」の撮影現場のスタイルを担当し、黒澤明監督から高い評価を得る。写真家として雑誌、広告などで活躍する一方で写真教育にも力を注ぎ、東京総合写真専門学校他で教鞭をとる。

独自のクールな表現で 1970 年代の写真に衝撃を与えた田村彰英。 国内初の集成展がいよいよ開催。

写真でしかできない表現が模索されていた 1970 年代、田村彰英が作り出すクールな作品は、多くの注目を浴びていました。その極めてシンプルな表現と透明性ゆえ、しばしば「難解」とされることもありましたが、鋭いインスピレーションに支えられた数々の作品によって、田村彰英はこの世代の代表的な作家として、今も走り続けています。

「田村彰英は徹底して感性的な作家である。良くも悪くも思想やイデオロギーは、この感性のフィルターによって排除されてきたといってよい。それほど感性のアンテナは鋭敏でかつエリアも広い。」（重森弘淹／写真評論家）

「かつて、日本現代写真における天才といえば、たったひとりの写真家を指したものだ。その写真家とは、田村彰英である。」（上野修／写真評論家）



＜名もなき風景のために＞より
《座礁船 三重県津市》 1994 年

学生の頃から撮りためた一連の基地シリーズで、衝撃的なデビューを飾った 69 年の個展「夢の光」から、43 年の時間を経て、幻のデビュー作〈BASE〉から最新作である〈BASE 2005-2012〉までを紹介する本展は、田村の写真表現の軌跡を概観する国内初の集成展です。柔軟にして鋭敏な田村のアンテナが捉えてきた風景の数々は、今なお新鮮な輝きを放ちつづけているのです。

主な出品作品

BASE

〈BASE〉は、1960 年代後半から 1970 年代前半にかけて、国内の米軍基地を撮影したシリーズです。ここに登場した基地は、横浜、横須賀、三沢、厚木、横田などですが、ベトナム戦争の激化を背景に、1968 年には原子力空母エンタープライズの佐世保寄港阻止闘争が起きるなど、撮影当時は「基地問題」が再燃していた時代であり、米軍基地を撮るという行為には常に政治的な解釈がつきまわっていました。

そのような時代にあって、田村は米軍基地をモチーフにしながらも、政治的な解釈や主張を盛り込むことはなく、まるで金網ひとつ隔てた外国の風景を見るように、自身の感覚で「基地」という世界を発見しようとしたのです。光り輝くジュラルミンとゆらめく陽炎。耳をつんざく金属音が聞こえてきそうな妖しい風景は、SF 的な世界ですらあります。〈BASE〉には、時代や状況に左右されない作家の確固とした視点が見て取れるのではないのでしょうか。



＜BASE＞より 《横須賀》 1969 年

家・道

〈家〉は、田村彰英が東京総合写真専門学校在学中の1967年から2年をかけて、造成された宅地に住宅が出現する様子を撮影したシリーズです。〈道〉はその後、1976年から5年をかけ、郊外の丘陵が切り拓かれ、横浜横須賀道路が完成するまでを撮影したものです。どちらのシリーズも、定点観測の手法で日常的な風景を捉えたものですが、時間の中で変化していく風景は田村自身の写真行為の「原型」であり、その後もくり返し取り組まれる主題となります。

同じ場所を年月をかけて撮影したこれらの作品は、結果としてある場所の変化の記録となっていますが、〈家〉の中に現れる激しい落雷、〈道〉に降り積もる雪など、偶然現れた要素を画面に取り入れることによって、同じ場所でありながらも、風景の中に新しい何かが再発見できるような、不思議な広がりを見ることができます。



〈家〉より 1968年6月22日

午後

このシリーズは、6×6判の中判カメラによるモノクローム作品として、1971年『美術手帖』6月号の扉ページに初めて登場し、以後、同誌に1973年までの間に30回連載されました。発表当時、これらの光と影が織りなす無国籍かつ断片的な情景は、日本的な情感やドキュメンタリーフォトとは完全に一線を画した表現として、同時代の写真家たちのスタイルに大きな影響を与えました。その後、『日本カメラ』1992年1月号から1年間にわたり連載された作品とともに再構成され、〈午後〉シリーズとしてまとめられています。

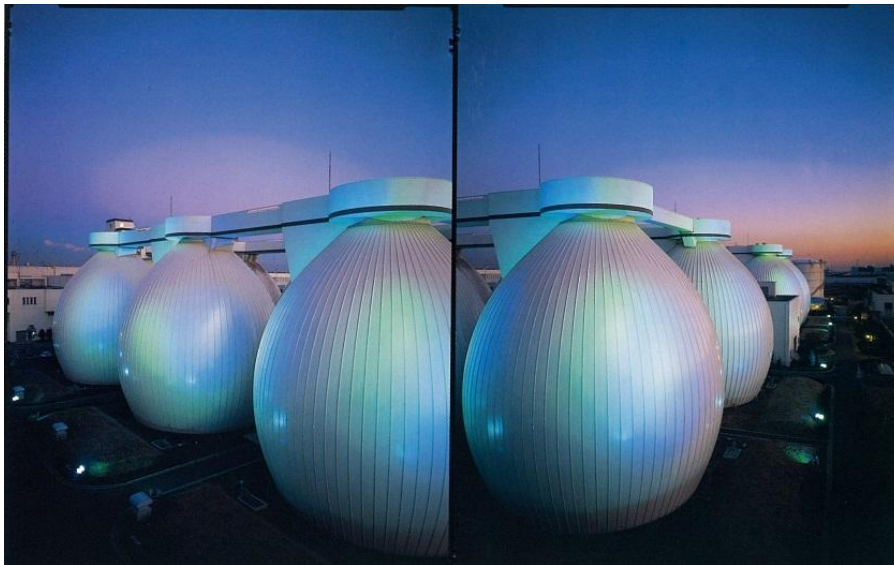


〈午後〉より 静岡県御殿場市 1973年

湾岸

定点観測の手法によって、時間の中で変化していく風景は田村彰英の作品にたびたび登場します。〈家〉や〈道〉のシリーズでは、静的でシンプルな被写体と向き合う作業でしたが、この〈湾岸〉シリーズでは、開発によって大きく変容する都市風景に目が向けられているところに、大きな特徴があります。

このシリーズを撮影するきっかけになったのは、1983年に吾妻橋近くの源森川水門を偶然訪れたことでした。冬の柔らかな日差しの中に浮かび上がる運河や水門、首都高速など、雑然とした景観の組み合わせに興味を湧き、以後、東京湾沿いに、日差しが一番美しい12月から1月初めにかけて撮影を続けました。やがて、建設中の横浜ベイブリッジや、土埃をあげて疾走するトラックなど、画面に動きのある被写体にも関心が向けられるようになります。4×5インチ判のポジフィルムを用い、2枚一組で構成し、時間の差や視点のズレを組み合わせるなど、さまざまな要素が一つの作品の中に並存していることもこのシリーズの興味深いところです。



＜湾岸＞より《横浜》
1992年 作家蔵

赤陽

1990年代はじめ、田村は台東区谷中に居を構えていました。この頃、8×10インチサイズの大型カメラに100年以上も昔に製造された古いレンズをつけて、身近な風景や建物を撮り始めます。田村が被写体を選んだのは、風化した古い木造住宅やモルタル建築など、どこにでもある無名のもの。1997年、田村はこれらの作品を「黄昏の光」と題してカメラ雑誌に発表しましたが、本展では〈赤陽〉という新たなタイトルをつけました。

「赤陽」とは、昭和初期にモダン都市東京を表現し、新進気鋭の版画家として注目を集めながらも、24歳の秋に消息を絶った藤牧義夫の代表作の題名でもあります。それは上野松坂屋の屋上から見た夕焼けの情景を、裂くような鑿の跡と現代的な構図によって表し、復興の高揚感と恐慌へと向かう時代の不安感までも表現した、この時代を象徴する版画作品とされています。田村は藤牧の作品とその謎めいた生き方に強く触発され、本シリーズを〈赤陽〉と名付けました。

本シリーズで田村は、時代を経たレンズを使い、風雨にさらされながら人々の生活に溶けこんできた風景を、黄昏の光の中で精緻に描写しました。このことは自身にとって「写真行為」そのものであり、「生きる」ことの証なのだと語っています。静謐なモノクロームの風景は、藤牧が遺した「時代に生きよ、時代を越えよ」という言葉と響き合い、いずれは消えてしまう建築物に、永遠の命が吹き込まれたかのような新鮮な感覚を覚えます。



左) 〈赤陽〉より
同潤会清砂通アパート
1997年 作家蔵

右) 〈赤陽〉より
台東区下谷 1997年
作家蔵

名もなき風景のために

稲田登戸病院、戦闘機ファントムの墜落現場、座礁したタンカー、オウム真理教のサティアン、陸前高田市、ハッ場ダム——。このシリーズに登場するのは、事件や事故の現場となり、マスコミでも大きく取り上げられ場所です。田村は、日常的な風景が、ある日突然非日常的になってしまう情景に強く惹かれ、被写体を求めて足を運びました。

《座礁船》は、造船所に係留されていた2艘の巨大タンカーが台風によって流され、津市の海岸に漂着した様子を捉えた作品です。ニュースでそのことを知り訪れた多くの人々が船を取り囲み、その光景に誰もが驚いているようですが、この作品には喧噪とともに不思議な静けさが同居しています。

平穏な日常の中に潜む非日常や狂気——田村の作品は、私たちの住む世界が不思議な均衡のうえに成り立っていることに気付かせてくれます。しかも、これらの風景と対峙するとき、美しさを感じずにはいられないでしょう。



<名もなき風景のために>より 《陸前高田》 2011年

BASE 2005-2012

デビュー作〈BASE〉を発表して約40年後の2009年、田村はその続編ともいえるシリーズをカメラ雑誌に発表しました。かつて写真評論家の重森弘淹が「(田村の)感性のアンテナは鋭敏でかつエリアも広い」と絶賛したデビュー作は、一方でテーマの重たさと時代性ゆえ、発表当時はさまざまな誤解や反論を巻き起こしたこともあり、そのことは田村の後の写真家人生に大きな影響を与えることになります。

田村が子どもだった頃、アメリカは夢の国でした。航空雑誌で見た飛行機の美しい描写に魅了され、写真家を夢見た少年は、写真を学ぶ中で「基地」が米ソ核戦略の緊張感の狭間に存在すること、そして美しい姿をした憧れの戦闘機が大量殺戮兵器でもあることを知り、気持ちが大きく揺さぶられるのでした。40年以上たった今でも、核兵器で一瞬にして世界が消滅してしまうことへの恐怖と、どこかエキゾチックな魅力を湛えた別世界のものに対する不思議な憧れは、田村の心から消えることはありませんでした。ジェット戦闘機の美しいシルエットや航空母艦の着艦乾板の幾重もの傷からは、一見するとコンセプトチュアル・アートのような構成的な美しさすら感じますが、田村の見つめる〈BASE〉の先にあるものは、混乱と矛盾と不条理に満ちた「夢の国」の現実なのです。



<BASE 2005-2012>より 《横田》 2009年 作家蔵

〈夢の光〉に寄せて 田村彰英

われわれは、自分たちの欠陥や弱さのゆえにではなく、自分たちの幻影のゆえに苦しんでいるのである。
われわれは現実ではなく、現実の変わりに置き替えたイメージにとりつかれている。

ダニエル・J.ブーアスティン『幻影の時代』（東京創元社、1964年）

初 心

私が、子供だった頃、アメリカは憧れの国だった。

テレビドラマの西部劇や、黄金の 50 年代、ホームドラマが輝いていた時代。アメリカに対する憧れは増すばかりであった。飛行機が好きだったので、BASE “YOKOTA” や “ATSUGI”、“YOKOSUKA” の存在を、飛行機の雑誌から知ることとなった。東京西部の武蔵野の雑木林と麦畑に囲まれた広大な、YOKOTA BASE の白いフェンスと、緑の芝生のアメリカの町と、滑走路の逃げ水に浮かぶ戦闘機のある空間が不思議に思えた。航空雑誌を見て、4×5 カメラとコダックのエクタクロームで撮影された美しい描写に魅了され、いつかカメラマンになりたいと思った。近くの写真学校に通い始め、さらに BASE への関心が深まった。

写真教育の中で、BASE が米ソ核戦略の緊張感の狭間に存在することを知った。あまりにも美しく、不条理な戦闘機を目の前にして、私の気持ちは揺さぶられた。核のボタンで、一瞬にして世界が消えてしまう恐怖と、エキゾチックで不思議な憧れという BASE の矛盾が、私の心を揺らしたのだ。

困難な時代

東日本大震災、原発事故など歴史上まれに見る困難な時代にプロ写真家として、すべての写真を作る人の意識として、無意識として、現実の状況を考えざるを得ないと私は思っている。本来、写真とは速報性、報道性を内包した芸術であると思う。

写真とは自分の心を写す鏡であり、自分が社会を見るための窓である。

(John Szarkowski, *Mirrors and Windows*, MoMA, 1978)

ニューヨーク近代美術館の写真部門ディレクターだった故ジョン・シャーコフスキー氏の名言を思い出す。この言葉は、今回の写真展のテーマでもある。現代の厳しい高度管理社会では、テーマ、主題、思想は、写真という表現手段を使い、いかに生きていくか、正しく生きていくかの方法を見届けるための芸術手段であると思うからである。私は心の中の混乱と矛盾の暗黒のかなたの光明（夢の光）を探し続けている。

輝ける誤解をめざして

暗黒のかなたの光明とは——。私の作品〈家〉の中の落雷の光、〈BASE〉の逃げ水に浮かぶ戦闘機の輝き、被災地に降り注ぐ光、福島第 1 原発の瓦礫に降り注ぐ光に対する集躁感かも知れない。困難と混乱のまま、何も解決出来ない苛立ちの感情を今回の写真展で表現したかった。

(たむら・あきひで／写真家)

関連事業

① 作家とゲストによる連続対談 各回とも 14:00-15:30

8月4日(土) 『カメラ毎日』とコンポラの時代」

ゲスト：前田利昭(『日本カメラ』編集長)、上野 修(写真評論家)

8月11日(土) 「売れる写真、新しい写真表現」

ゲスト：町口 覚(アートディレクター)、町口 景(アートディレクター)

8月25日(土) 「写真を読む、写真を楽しむ」

ゲスト：三浦しをん(作家)

② 作家とゲストによるトーク&ギターライブ 「ライカとクラシックカメラの夕べ」

9月7日(金) 18:30-20:00

ゲスト：永田 徹(ISO/TC42〈写真〉国際エキスパート)、板井公規(ギタリスト)

上記2つとも 対象：展覧会チケットをお持ちの方 会場：2階ラウンジ(定員50名)

受付：当日10:00より当館1階受付にて整理番号つき入場券を配布します。

③ 担当学芸員によるフロアレクチャー 毎月第2・4金曜日 14:00-

※本展覧会の半券(当日有効)をお持ちの上、会場入り口にお集まりください。

開催概要

展覧会名 田村彰英 夢の光(英名：Tamura Akihide Exhibition: Light of Dreams)

会 期 2012年7月21日(土)～2012年9月23日(日)

主 催 東京都 東京都写真美術館／読売新聞社／美術館連絡協議会

助 成 芸術文化振興基金

協 賛 ライオン株式会社／清水建設株式会社／大日本印刷株式会社／株式会社損害保険ジャパン／
日本テレビ放送網株式会社

協 力 日本カメラ社

会 場 **東京都写真美術館** 2階展示室

〒153-0062 東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内

ホームページ www.syabi.com 電話 03-3280-0099

開館時間 10:00～18:00(木・金は20:00まで) ※入館は閉館の30分前まで

休館日 毎週月曜日(ただし月曜日が祝日の場合は開館し、翌火曜日休館)

観覧料 一般 600(480)円／学生 500(400)円／中高生・65歳以上 400(320)円

※()は20名以上団体料金 ※東京都写真美術館友の会会員、小学生以下および障害者手帳をお持ちの方
とその介護者は無料 ※第3水曜日は65歳以上無料

交通機関 JR 恵比寿駅東口より徒歩約7分／東京メトロ日比谷線恵比寿駅より徒歩約10分

※当館には専用の駐車場がありません。お車でご来館の際は近隣の有料駐車場をご利用ください。

■お問い合わせ

東京都写真美術館 電話：03(3280)0034 FAX：03(3280)0033

展覧会担当 関次 和子 k.sekiji@syabi.com

石田 哲朗 t.ishida@syabi.com 山峰潤也 j.yamamine@syabi.com

広報担当 久代 明子 a.kushiro@syabi.com 平澤 綾乃 a.hirasawa@syabi.com

前原 貴子 t.maehara@syabi.com

プレス掲載用に図版データをご用意しています。上記広報担当までお問い合わせください